

## <エッセイ>

### 私が“アイドル”を辞めなかった理由

### Why I Didn't Quit Being an “Idol”

モモコグミカンパニー

Momoko Gumi Company

私は、大学在学中から、BiSH というグループに 8 年間所属し、2023 年 6 月に東京ドームで解散を迎えた後、現在は執筆活動や、舞台など、自分の枠にとらわれないことを念頭に活動している。そんな私だが、元々表に出るような抜群の容姿や、歌、パフォーマンス能力があったわけではない。グループに入る前も、特に目立つ方ではなかった。

アイドルに関心を持ち始めたのは知らない世界を見たいという好奇心からだった。そして、続けてこられたのは、夢だった作詞ができたことも大きかった。やりたいことができていると言っても、活動の他の 9 割は、慣れないことばかりだった。BiSH での活動は、かなり体育会系でハード、気力と体力勝負だった。グループ自体は好きだったが、そんな「好き」だけでグループ活動が続けるのは、正直難しかったと思う。実際、メジャーデビューのタイミングで、グループを辞めてまた別の進路を歩むことも本気で考えた。

私がアイドルを辞めなかった理由を今振り返って考えてみると、大好きなグループに穴を開けて迷惑をかけたくないことも大前提あったが、自分の性格がアイドルに向いていたのも大きかったのではないかと思う。性格というか、私の社会での振る舞いと言ったほうが近いかもしれない。

私には、物心ついた時から自分の中にもう一人の自分がいた。本当の自分と、人に見せる用の自分といった感じだ。子供の頃から、感情をそのまま出すよりも、その状況において、どう振る舞うべきか、目の前の人にはどんな言葉を求めているのか、そんなことを自分なりに把握してから表現する。例えば、泣きたいことがあっても、今自分が泣いたらどうなるかを考えてから、泣くかどうか決める。そんな風にワンクッション置いてから、“自分”を表現する、少し変わった癖のある子供だった。つまり、幼少期から“演技”しているもう一人の自分を自覚していたのだ。

そんな私は、大学では社会学者ゴフマンの、役割演技という理論と当時の自分のアイドルの経験を掛け合わせ、『アイドルと「演じる」こと：一人の人間の虚像と実像』というタイトルの卒論を書いた。ゴフマンは、「人は社会生活を円滑にするために自分を演出している」と考えた。例えば母親だったら母親として、子供は子供として振る舞い、日常の中でそれぞれの役割を演じているということだ。

そんな私だが、活動当時メンバーの中では「一番人間味がある」と受け手であるファンに評価を受けていた。しかしこれは、私という人間の評価というより、私が見せている側面への評価のように思っていた。私自身の感覚だと、表に出す“人間味”を冷静に見極めている自分が常

にいて、「カッコつけていない、人間味のある自分」を受け手に愛されるために積極的に出していた。もちろんそれは、偽物の人間味ではない。数ある自分の中の感情や人格の中でこの部分を SNS に投稿しよう、ステージで発言しよう、ファンとコミュニケーションしようと少なからず意識していたということだ。というか、そんな人間味くらいしか、アーティスト気質のメンバーの中で自分が売りになるものがないと思っていたところもある。

このように昔から“演技”してきた私にとって、アイドルという仕事は案外自然なものだったのかもしれない。アイドルは「見えているものが全て」の仕事だ。そして私は、数ある自分の中から何を見せるかを選ぶことに慣れていた。

ここで、2020 年コロナ禍に出版した『君が夢に出てきたよ』というエッセイの一部分を引用する。

わたしはファンレターを読むのが好きだ。活字とは違い、その人の字を見るだけで何となく伝わってくるものがあるし、なにより心をこめて書いてくれるのがうれしいのだ。内容は送り手の個性に彩られていて、BiSH やモモコグミカンパニーが自分にとってどういう存在なのかを書いているけど、みんな“自分”のことを書いているなとも思った。「モモコさんのチェキ列が最近長くなってきましたね、モモコさんの魅力を伝えるのが私の使命だと思っていたので私としてもうれしい限りです」「最近仕事で昇格しました」「私も喫茶店が好きです」「僕のおすすめのこの本をぜひ読んでください」 ～略 【ファンレター】より抜粋

この文を読み返すと、ファンレターに対し好意的な言葉を並べながらも【みんな“自分”のことを書いているな】という部分をとてドライに感じる。自身の“人間味”を選んで出していた私は、その反面、受け手が表の自分にどれだけ共感してくれたところで、全部は分かってもらえない、満たされないものを常に抱えていた気もするのだ。本当の自分なんて、自分でもよく分からないけれど、もしかしたら私は、アイドルとして愛されるために、裏で必死に人間味を選別するドライな自分のこともどこかで認めてほしいと思っていたのかもしれない。けれど、そんな空虚を抱えながらステージに立つことが、アイドルという仕事だったのかもしれないと思うのだ。